

「失われた」発話を見いだす [Ⅲ シャルリュス男爵①]

上 西 妙 子

Summary

Retrouver des paroles perdues [III Le baron de Charlus ①]

UENISHI Taeko

Le baron de Charlus peut être qualifié de personnage odieux: son expressivité passionnée étant engendrée par une passivité arbitrairement fantastique. Par exemple, il s’amuse à figurer certains personnages historiques pour leur image héroïque. Cela satisfait son penchant tenace de se valoriser aux yeux des autres. Il semble incarner l’égoïsme solitaire de notre “moi”.

Ainsi cherche-t-il à s’user, motivé d’une part par la volonté de s’exprimer et d’autre part, par l’énivrement puisé préalablement dans l’image qu’il s’est façonné de lui-même. Ses tentatives atteignent leur paroxysme, dans un hôtel parisien, sous les bombardements, où le baron demande à ses partenaires de lui raconter des histoires fictives mais, qu’il tiendra pour véridiques tant qu’ils réussiront à le faire y croire. En fait, il ne fait autre chose que d’accepter d’être un vague succédané qui se contente d’une consommation immédiate et de jouir volontiers de l’instant qu’il vit.

Plus tard, quand Charlus se sent menacé des symptômes de l’aphasie, il arrête immédiatement la phrase commencée et y rattache, en réalité, un mot dit pour un autre, mais qu’il semble avoir choisi lui-même; il le fait avec la même aisance que lorsqu’il se plonge dans les jeux de fantaisie. Ce sur quoi il mise s’accorde bien avec l’automatisme dont se munie le langage.

Les tentatives naïves de Charlus, comme un moyen de jouir passagèrement des moments factices, seront poursuivies par Proust qui y incorpore la notion “le temps”, en allant au-delà de l’automatisme pour arriver aux domaines du symbolisme, acte mental face au monde qui se crée en parallèle avec la cognition naissante. Nous y verrons s’établir un univers qui «est vrai pour nous tous et dissemblable pour chacun».

序

『失われた時を求めて』において、おぞましさを極端に体現する人物とされるのがシャルリュス男爵である。おぞましさとは、意識外に止めようとするイメージが形を成すのを目にするときに人が捉えられる感覚であり、それゆえ幻想的ともとれるあり方である。幻想には視像がともなう。シャルリュスの外観の描写は、たしかに視覚的な華やかさに彩られている⁽¹⁾が、それはどういう内的な力学によるのだろうか。彼はソドムの末裔であり、プルーストは彼ら同性愛者をユダヤ人と共通するあり方として以下のように描く。

彼らは互いに避けあい、自分たちとは正反対の、自分たちを嫌う人々を求め、そういう人たちの手荒な拒絶は大目みで、彼らのお世辞にはうっとりする。また一方、自分たちに加えられるオストラシズムと自分たちが陥った汚辱のゆえに同類の者とあい集まり（…）同類者との付き合いのうちに、あるくつろぎを感じ、そういう彼らの存在に一つの支えをすらし見いだしている。だから、自分たちが一つの種族であることを否認しつつも（その名をいわれることはもっとも大きな侮辱なのだが）、その一人であることをうまく隠しおおせた者たちがいると、彼らは好んでそういった者たちの正体を暴くのだが、それは彼らを傷つけたいというよりも、それも嫌いではないのだが、自分の言い訳をするためなのだ。
(III, 18)

そのあり方とは、＜自分自身に似る＝自分らしくあること＞からの逃避でもある。彼らは物理的な結集、体感としての凝集への誘いを知ると同時に、意識的には拡散を求める。分裂したそのあり方は、彼らのあり方のそれぞれに激しさを与えるだろう。

シャルリュス男爵は『失われた時を求めて』において、権威をもって社交界に君臨して横暴にふるまう姿から、威信を失い、身体の不調と加齢による変貌を見せるまでが描かれる。それは、シャルリュスの＜自己＞をめぐる仕掛けへのこだわりが、その試行の中で至るべくして至る形をとるプロセスである。本稿は『失われた時を求めて』の中で、その変貌の幅において特異さを見せるシャルリュス男爵を例として、プルーストが＜romanesque 小説ふう＞とするところの、「いると思われるところにはいないのだが、思いもしないところに、ずうずうしく罰せられずに広がっている（III, 19）」彼らのあり方を、拡散と凝集を軸にして考察するものである。拡散と凝集の恣意的なからみとは、ファンテジー（自由奔放な思いつき）の生態でもある。しかし、空想好きでおぞましい人間のあり方とは、自身を探し続け、試し続ける人間、つまりは、私たちが確実に持っているあるひとつの傾向ではないだろうか。

①命名の凝集と拡散

シャルリュスの肩書きの詳細は、彼自身によって以下のように紹介される。それは、ブルジ



ジャン・ポルディーニ
『ロベール・ド・モンテスキウの肖像』



エル・グレコ
『枢機卿フェルナンド・ニーニョ・デ・ゲバラ』

ヨワのヴェルデュラン家のサロンにおいてであった。彼に対して通常もちいられるのは男爵であるが、この呼称の位階としての相対的な低さをそのままに取ったヴェルデュラン氏はサロンでのシャルリュスの着席順の弁明として、「しかし要するに、カンブルメール氏がいらっしやったので。氏は侯爵でいらっしやるから、そしてあなたは男爵ということなので…」と言う。その返答として披露はなされた。「失礼ながら」とシャルリュス氏は見下すように答え、驚くヴェルデュラン氏に向って言う。「私は、ブラバン公爵、モンタルジ公子、オレロン、カランシ、ヴィアレジオとレ・デュヌの大公でもあるんです (III, 333)」。

この多彩な肩書きを持つ彼の愛称はメメであるが、第1次大戦の空襲下のパリでは、入り浸る男色宿においては「鎖につながれた男 (IV, 400)」とも呼ばれる一方、愛称「パメラ・ラ・シャルムーズ」⁽²⁾をも与えられ、「その者」であることに没入する。名称において、彼は広汎な分散と単純な凝集を負っている⁽³⁾。それは、彼に自己愛的な自己像の生成をおもることにもなるだろう。

一般的なことでもあるが、彼ら同性愛者において、新規の命名、愛称が好まれることは理解できる⁽⁴⁾。必然のあり方の改めでの確認として、命名の過程が凝集して意識される愛称においては、自己表現（演技力）は＜小説ふう＞の能動の力を得る。呼び掛けに応じて、＜私＞は現われようとする。呼び掛けの極端な場合が、イメージに転化しうる身体に受ける刺激であろう。たとえば、男色宿でシャルリュスが受ける身体への刺激は、想像的なものの全体性を生む。強い体感としての凝集は、仮であって必然の愛称に凝集するのであり、シャルリュスはこの男色宿において、自身の命名にいたる必然の物語性を反復して感じとろうとする。だが後に見るように、それはうまくは行かない。相手を務める若者は、シャルリュスに応える同等の恣意的な凝集を持つことはない。シャルリュスの仮装の試みは、その熱意の中にすでに、それを意図する彼の側での粗忽さを見せるものである。次の例である。

名による呼び掛けに代わる動機となるのは、モデルに倣い、それに自らをなぞらえることであろうが、シャルリュスは自身を一種の生きた絵画 (III, 357) にすると同時に、自らを鑑賞者にもする。たとえばサン＝シモンを参照して、「ユクセル元帥のふりをして楽しむ⁽⁵⁾」。また無邪気にも、喧嘩好きの気性を彼は祖先から受け継いだと信じており、結局はとりやめとなったのだが、「まったくの作り話のつもりだった決闘を考えて悦に入る (III, 457)」。[ゲルマント一族の名高い名将と一体化した]と感じる彼は、「前代未聞の大事件、名将の末裔が一戦交える」ところを思い描いたのであったが、しかし、「それが他人のこととなると、決闘の場に赴くという同じ行為も彼にはまったく無意味に見えた (III, 456)」ということなのだ。それは、彼自身を中心とする物語構成には、見物人を想定したうでの歴史的、ジャーナリズム的な広がりを持たせているにしても、この幻想への埋没は、実は、束の間の気なぐさめでしかなく、シャルリュスはそうと知って活用するという消極性を受け入れているということなのだ。

すなわち、シャルリュス自らが「曖昧な代用品」であることを受け入れるということだ。というのは、「愛する人のために愛情がきわめて大きな犠牲を私たちに払わせるものであるばかりか、ときには欲望そのものを犠牲にさせることもある (IV, 397)」とプルーストが言うように、彼はモレルに去られた失意を、モレルに似ている男という「曖昧な代用品 (IV, 397)」を求めることによって癒そうとする。しかし宿でジュピヤンが「同一のタイプの男 (IV, 397)」に引き合わせるにしても、それは結局は、強い欲望が自発性の因果の混乱を引き起こすという不運な例を彼が生きることになることに見られる。これは、欲望の対象を所有するにいたらないことが、その欲望の生命力であるとする考えとともに、プルーストに見られる悲観的に貪欲な「見果てぬ欲望」充足論である。シャルリュスが見せるファンテジーの性急な消費は、自発性の積極的な抑制につながるが、そのあわれなメカニズムをいかに越えるかを、プルーストはどこかに示唆しているはずだ。

後に見る男色宿では、シャルリュスは相手を務める若者に、戦慄を誘うような暴力と汚辱の身の上話を求めることで好みのドラマの中心に自身を置こうとするのだが、彼が相手に「おぞましさを求めるということ」、すなわち、まさに予期像をもって対面することが失意をも同様に用意することになるのだ。例えば、「無邪気にもジゴロ (男妾) というものを好きなように捉えていた客は啞然とする。というのは、相手は数々の殺人ができる人間だと思い込んでわくわくしている客は、相手の言葉に見つける食い違いや嘘に仰天してしまう (IV, 403-4)」ということだ。食い違いの具体化しか他人に見せるものではない個々人は、他人からの命名との関わりにおいては本物でも偽物でもない。命名を先行させることによる誘導は、凝集という介入なのだ。強力な空想家シャルリュスはなかなか醒めることはなく、執拗な探求が彼の身体を不如意と失語症に導くことになっても、貪欲な熱意をもって体勢をたてなおそうとする姿を後に見せることになるだろう。

この自己演出による凝集の対極には、無防備な独白がある。それは例えば、移動中のシャルリュスである。「パリで彼に会うのは夜会の時だけで、不動の身体をびったりと黒い燕尾服に包み、傲然とした姿勢で、他人の気をひこうとする熱意と、矢継ぎばやに会話を繰り出しては

背筋をぴんとたてていたの、彼がこんなに年をとっているとは私は思っていなかった」。駅の待合室で見かけた彼は、「明るい旅行用のスーツを着ているので、ずっと太って見え、よちよち歩き、突き出た腹とほとんど象徴的な尻をゆすっていた (III, 254)」。歩行による無防備な表白は、拡散的な凝集である。それは自意識の呼び掛けによるのではなく、分散しつつ自発的にまとまった姿である。

他方、演じる人（自らに対して見せる人）の位置からずれたシャルリュスとは、たとえば、社交界という場から退去する姿であり、そのとき彼は拡散において凝集を見せることになる。以下は、親族の病氣見舞いという付き合いの儀礼に、わずか数分を費やしてヴィルパリジス邸から出てきたときのシャルリュスの姿である。

この時、誰にも見られていないと信じていた彼は顔を太陽にむけて閉じており、その顔の上に緊張を解き放ち、会話の活気や意志の強さが彼に持続させていた作り物の活力を和らげていた。大理石のように青ざめ、がっしりした鼻を持つ彼であったが、その繊細な顔立ちはもう、意志的な視線が見つけたさそうとするような別の意味作用、いいかえれば、それらのモデルの美を変えるような意味作用をもう受け入れはしなかった。彼はゲルマント族の一員というだけであり、はや彼は、コンプレの教会に彫刻されたパラメード15世であった。(III, 5)

拡散が、多層性の底の地模様を見せる。だがその整然としたあり方は、ある種の行き過ぎ、つまり強調されすぎたポーズでもある。なぜならシャルリュスは、このとき浮かびでた地模様を再びおおうであろう外皮との流動性、つまり、2極を含むダイナミズムとしてあるといえるからだ。

その動きを見てみよう。この、誰にも見られていないと思っている時のシャルリュスであるが、彼は一族の中でもより精神的で、とくに甘美な繊細さを持っているのであり、ヴィルパリジス邸から出てきたときには、たしかに「偽りの野蛮さのしたに彼が隠している奥ゆかしさ、善意」が、その顔に馬鹿正直に広がっていた。「激しく熱中し、その男らしさを自慢とし、彼と比べたら誰もかも気味悪く女性的に見えるような」シャルリュスであるが、「太陽に眼を細め、殆どほほえんでいるかに見える」彼の「休息中でいわば自然な状態」にある表情が語り手に考えさせたのは、「一人の女性」(III, 6) だった。このように感知する器官とは、対象の呼吸する生態のありのままをとらえる機能のあるような器官であるといえる。それから10頁の後に語り手は、つい先ほどヴィルパリジス夫人のところから出てくるシャルリュス氏を見たときに、なぜ彼が女のように思ったのかを理解する。

彼は一人の女だったのである！ 彼が属している種族は、見かけのように矛盾した人々ではなく、男性的なものを理想とするのは、まさに彼らの気質が女性的であり、彼らは実生活では、ただ外観だけ他の男たちに似ているのだ。(III, 16)

彼が属する種族の男たちは相補的な2極を一つとして生き、刻々の生は流動性として生きられている。男性的なものを理想とする気質（女性）は、実生活の外観（男性）に対抗する内面を維持する。そのことは、彼ら同性愛者を「嘘と偽りの誓いに生きる種族（III, 16）」とする語り手による呼称に示されている。つまり、彼らは本質（女性）と外観（男性）との不一致を見つづけることの不可能を誓いとしつつ、その全体のからくりを維持するなかで外観と本質の対照の際立ちを意図するということであり、そのことはとりもなおさず、彼ら自身が両者の通底性、一体性、一義性の例証としてあることに執着することを示すのである。

このように語り手によって目撃されたシャルリュスは、続いて中庭で元チョッキ職人のジュピヤンに出会う。「なかば閉じていた眼を不意に大きく見開き、異様な注意をこめてみつめる」シャルリュスに対して、『秘術の掟にでも従うように』、ジュピヤンの態度もたちまち「調和し始める（III, 6）」。神妙な滑稽さが見られるのであるが、語り手は言う。「もっともこの場面は、ただひたすら滑稽だったのではなかった。それは、ある奇妙さ、ないしは美しさを増していくある自然さともいえるものに刻印されていた（III, 7）」。誘われ、気付き、促されながらの凝集と拡散のある動的な相関のプロセスでは、奇妙さが「美しさを増す自然さ」に重なる⁽⁶⁾。おぞましさを覚えるのは、そういう奇妙でいて美しさを増す自然がありえてしまうことに対してである。二人の出会いはやはり、「奇妙に美しく自然な」稀な共感の時である。実生活のプルストについては、召使たちへの優しさが報告されている。彼は、従属関係の中での相互の優しさを知る人であった。作品内においても、対等の人間関係を描かなかったといえる。しかし、恒常的に対等な実践的關係などありえるのだろうか。物語の最終部において、このジュピヤンは身体不随となったシャルリュスの世話を献身的にすることになる。

②判断すること

以上に見たのは、「目にしたままを言葉にする」という行為が、そこに見え隠れする対象の生理を見届けるともいえる形でなされている例であった。つぎに見る一単位としてとらえるテキストには、論述内容が立脚する客観性にいくつかのレヴェルが見られる。それは、対象を見届ける側における自己位置の定め方の生理ともいえるものである。テキストは、『囚われの女』中の「ベルゴットの死」（III, 692-5）の叙述である。作家ベルゴットという人物造形は、作中人物のなかでも、プルストにとって最も微妙なものであったはずだ。そのベルゴットの死の経緯を語る文脈を取りあげたい。ベルゴットは、ある批評家が新聞でフェルメールの『デルフト風景』中に見事に描かれた「黄色い小さな壁」に言及しているのを見た。彼は病いをおして展覧会にでかけ、そこで倒れる。めまいに襲われるなかで、「こんなふうに自分も描くべきだった」と、ベルゴットはそこに芸術の理想の表現を見たと信じるのだった。彼の死が引き起こされる経緯を語るこの部分のテキストの構成は、深い思索の一方に、くだくだしい日常的な内省が交差するという異様さを見せるものである⁽⁶⁾。

a : III, 687-692 (225行) 「この日、私に大きな悲しみを与えたひとつの死を知った。ベ

ルゴットの死である」で始まる画家ベルゴットの死と、それに先立つ彼の病いと不眠についての叙述。ここでは知識や情報を含む詳細な病いの経緯が、〈事実〉が人に理解させると考えられている〈本当らしさ〉において伝えられる。

- b : III, 692-3 (67行) フェルメール展に出かけたベルゴットが倒れる経緯。「天上の秤の上では、一方の皿には彼の生命が、もう一方の皿には見事に黄色に描かれた小さな壁がのっているのが見えた。彼は自分が軽率にも、後者のために生命を犠牲にしたように感じた。彼は考えた、『それにしても、展覧会の夕刊の三面記事にはなりたくないもんだ』。彼は心に繰り返した、『庇のついた黄色い小さな壁、黄色い小さな壁』。そうつぶやきながら彼は半円形のソファにくずれ落ちた。そのとたんにもう自分の命が危ないとは思わなくなり、再び楽観的な気持ちに戻って考えた、『あのジャガ芋が生煮えだったから、ちょっと消化不良を起しただけだ。なんでもない』。新たな発作が彼をうちのめした。彼はソファから床にころがった」。ここでは、捉えこまれた状況を人間が外から捉えなおすときに見せうる視野の狭さが示される。
- c : III, 693 (4行) 「埋葬はすんだ。しかし葬送の夜もすがら、明かりのともされた窓際には、彼の著書が3冊づつ置かれ、羽を広げた天使のように見守り、もはやいない人にとっての復活の象徴のように見えた」という記述。
- d : 一行の空白。
- e : III, 693-4 (24行) 「ベルゴットが亡くなったということを、私とその日に聞いたことは先に言った。私は新聞の不正確さ—どれもこれも同じ記事をのせていた—に驚いた。新聞は、彼が前の日に死んだように書いている。ところが前の日は、アルベルチーナが彼に会っていたのであり、まさにその夜、私にそう言い、彼がかなり長く彼女と話しこんだので、それで彼女の帰りが遅くなったくらいだ」と、語り手の仲介で画家とアルベルチーナは、新聞が彼が亡くなったと言っている日に会っていることを語り、彼女がベルゴットの紹介を語り手に依頼した経緯が語られる。
- f : (12行) 続くのは、日常での、些細でいて執拗な気掛かりのあり方である。「私はだいぶ経ってから、新聞を不正確だと非難したのは間違いだったと悟った。というのも、その日アルベルチーナは、ベルゴットに会いなどしなかったのである。(…)彼女があっさり嘘をつくときの、うっとりさせられる巧妙さに気づいたのは、だいぶ経ってからだった」。このように、アルベルチーナのごく自然な語り口の報告を信じていた語り手は、彼女の嘘に気づくと同時に、アルベルチーナの「嘘のつき方の魅力」を思う。
- g : (1行) 本稿がその一部を成す論考「『失われた』発話を見いだす」の副題として選んだ「私たちはだれしもこの世界を真実だと思っているが、それは各人にとって異なった世界である」の記述。この「事実」が以下に、「内省」において日常的な度合を増して語られることになる。
- h : (12.5行) 「もしその時私が外に居合わせたなら、おそらく感覚の証言によって、当の

夫人がアルベルチヌと一緒に歩きなどしなかったことが分かっただろう。だが私がこれを嘘だと見抜いたのは、感覚の証言によってではなく、一連の類推によってだった」という、「感覚と類推の証言」の議論が展開される。そこで語られるのは、感覚が捉えることは確認（確信）につながるとされがちだが、「感覚の証言もまた精神の操作であり、そこでは確信が明らかな事実をつくりだす」ということである。簡単な例で言えば、思い込んだことを聞く聴覚であり、こうして「事実」の持ちうる客観性が疑問に付される。

- i : (4行) たえばフランソワーズである。「フランソワーズの聴覚は、実際発音された言葉ではなく、彼女が正しいと信じた言葉を彼女に伝え、それで、正しい発音でそれとなく直してやっても、彼女には聞こえなくなってしまう」。
- j : (20行) pissotière (ピソチエール) を pistière (ピスチエール) と聞く給仕頭の耳と、彼の言い方の例としてのシャルリュスの噂話 (以下に引用)。

a ~ j に分割した文章の各々は、内容への心理的関与度、そして情報の共有可能性を異にしている。その観点からこの文脈の構成をとらえ直すと、以下のようになるだろう。(a) 共有情報の客観性を信じてなされる一般的な伝達法。(b) 不意の状況にとらえられた人間が無力ゆえに呈する雑駁性の「ありのまま」が持つ滑稽さとは、人間的な生の幅での暗部であるが、共感されるにしても共有されるものではない。(c) メタファー。すぐれて個の領域でありつつ共感を誘い、共有を志向する。(d) 一行の空白という、発話準備のための沈黙、もしくは思考停止。(e)、(f) は、前後する動きにからめとられている日常的な内省。(g)、(h) は、感覚や類推が確信を呼び寄せて<事実>とつながっていくという、<人間的事実>の不確かさを語る。そしてこれらの全体は、人が見せる認識の誤りも不誠実もともに、結局は証明不可能であることを語っている。

このように示される、言述の中への客観性の取込みの異なる姿勢が向かいあっているのは、死ともつりあう芸術の「意味」、そして共有しうる「報道の正確さ」であり、さらには嘘を介在させたり、頑固な思い込みのままに、相対的な価値に身をあづける人間の際限のない些末な事実例である。文脈の規定としての「ベルゴットの死」が「ベルゴットが死んだ日」へとすりかえられることによって、その限定が緩くなったのだ。そうして導き入れられた、きわめて日常的な迂闊さに満ちた議論が続きえたのも、実はベルゴットが死んだ日と重なって、「アルベルチヌの嘘」がたまたま発せられたという、偶然でもあれば必然の悪意の契機が絡んでいたからだ。意味の探求がはぐらかされる運びであるが、こんなふうには些細な偶然と人間的な意味の探求がからみあう時空こそが、『失われた時を求めて』においてプルーストが定めた時空である。まさに探求が意味を失いかねない地点において、欠損をはらみつつも生成される意味の被操作性の中において、プルーストの言語は探求される。

このような迂闊でいて深遠という意味作用は、pissotière が pistière と聞こえる使用人頭、つまり、判断力に欠陥があるわけではなく、単に耳に癖のある人間によってなされるシャルリュ

ス観の提示のなかにも見られるはずだ。すなわち、その頃のシャルリュス氏は、派手でひどく目立つズボンをはいていた。ところで使用人頭は、「ピソチエール pissotière (男子用公衆便所)」という言葉で「ピスチエール pistière」だと思い込んでおり、「ピソチエール」という発音は今まで一度として聞いたことがないような気でいた。人々は彼の前でしょっちゅう「ピソチエール」と発音していたのだが、「勘違いは信仰以上に頑固なもので、信じ込んだことを検討しようとしてもしない。使用人頭はしじゅうこんな言い方をするのだった」。

「あんなに長い間ピスチエールにいられるなんて、シャルリュス男爵はきつとご病気だね。まったくあれが、女のお尻を追い回すお年寄ということだね。いかにもそれらしいズボンをおはきだ。今朝も奥様のお使いでヌイイーまで行ったんだよ。そしたらブルゴーニュ通りのピスチエールに男爵がお入りになるのが見えたんだ。ヌイイーからの帰りに、一時間はたっていたんだが、あの方の黄色いズボンが、同じピスチエールの同じ場所、真ん中に見えるんだよ。人に見られないように、いつもそこに立たれるんだ」。(III, 694-5)

「まったくあれが、…なんだ」という、安心して人が下す通俗的な判断は、判断の是非も論述内容の価値も不問にしようとする発話である。そういう意味で、事実から遠ざかっているうえに事実に対して無関心でもあるというのに、人々に深く浸透し流通している言葉である。使用人頭がシャルリュス老人が持っているのだと信じている執着に対して発する驚嘆は、使用人頭独自のものである「ピスチエールなるもの」への固着と対等の軽さである。

思想の言葉に翻訳されることなく生きられるものの一方に、主体にとって自明なものとして表現されるものとしてのイデオロギーがある。イデオロギー的言説は、単なる耳の癖と同様に、自らを批判し疑うことがない。上記の (a) から (j) において分類される判断の仕方の「生理」は、「人間は自己から外に出ることのできない存在であり、自己においてしか他人を知ることはできない (IV, 34)」という大きな事態のなかで、日常的に生きのびるために生みだされているものだ。そういう生態を持つ人間の世界とは、「ただ一つの世界ではない」。そこには、「何百万の世界、人間の験や知性とほとんど同じ数の世界があり、それらが毎朝、目覚めるのだ (III, 696)」とまとめられるだろう。

この文脈に唐突に挿入されている、「世界は私たちみんなにとって真実なものに見えるが、それは各人によって異なっている」という観点は、本稿がその一部をなす論考「『失われた』発話を見いだす」の副タイトルである。これをシャルリュスにあてはめて考えると、彼が人を翻弄しつつ、それよりも自らが翻弄されていることを私たちに考えさせる。

③ passion, 受動、立往生

シャルリュスの示す恣意的な受動性の混乱と能動的な戯れは、以下のように表現できるだろう。「シャルリュス氏に似た男たちのそれぞれは *créature extraordinaire* (常軌を逸した被造物) である。というのは、*vie* (生) の可能性に譲歩せず、本質的に他種族の男の愛を、すな

わち女たちを愛する男（ということは、結局、同性愛者を愛することのできない男）の愛を求める（III, 32）」からだ。そうすると、彼らはナルシスの無謀な突っ走りと、そうして受け取ることになる不協和音を生き続けるということなのだ。シャルリュスの実在のモデルのなかでも大きな存在とされるモンテスキウ伯爵は、プルーストの社交界に対するアンヴィヴァレントな感情、すなわち憧れと反発を引き出した人物である。両価性は、典型としてあったシャルリュスの肉体が型の模倣に成り立つ社交界で、年月を経て示す崩壊に姿をかえていく。

作中で語られるシャルリュスの変転のエピソードを段階的に描けば以下のようなになる。①社交界での尊大な君臨。②同性愛への耽溺の現場が、偶然の機会に語り手によって覗き見られる。③ヴェルデュラン家での屈辱。④病気と回復。⑤第一次大戦下でのパリで見かけられた頹廢の姿。⑥物語の終わり、ゲルマント大公邸の午後の集まりでの姿、である。これらは「見せる」姿から、すでにそこに語られていた「見られるがままにある」シャルリュスへといたる過程である。人々に取り囲まれて、人に「見せてやる」のだとシャルリュスがするその魂胆が、見られるがままの観察と一体となっている一例を、以下に見てみよう。

バルベックの海岸で、その正体をしらないままに語り手が初めて見かけるシャルリュスの描写である⁽⁷⁾。

その男は私のうえに、大胆で用心深く、すばやくて深い、まるで遁走する際に放つ最後の一弾のような究極の流し目を投げた。それから、まわりをぐるりと見回したのち、突然、気のなさそうな尊大な様子になると、全身を不意に旋回させて芝居のポスターの方に向け、それを熱心に読みながらなにかの歌の節を口ずさみ、ボタン穴にさがっている苔薔薇の花を挿しなおした。彼はポケットから手帳を出すと、そこに公告の芝居の題目を写しとる振りをし、(…) ずいぶん待たされたということを人に見せるものと思っはいるが、実際に待たされているときには決してしない不満そうな身振りをし(…)、あまり暑くもないのに暑くてたまらぬ様子を見せたい人がするように、わざと音をたてて息を吐いた。

(II, 110-1)

彼は痛切に自らを意識しもすれば、自らのあり方が見られるがままであることを否認し⁽⁸⁾、定まらないものとしての自己像にこだわる。気弱ともいえる逡巡は、傲慢でしかない一途さのひとつである。シャルリュスは過剰な表現において、そのメッセージを無意味にもしてしまう。それは表現者が持つ、他者を説得しようとする熱意と、その一方で持っているべき企図の遂行への配慮が齟齬するというイロニーであるが、しかし彼らは、その二重性のままを欲するのかもしれない。熱意と企図のずれの過程に、対立するものがあるゆえに分解する過程に、彼らの自分を確認する動きがあるのかもしれない。上記の描写は、情念 *passion* は受動なのであり、我々の意のままにならないということを考えさせる。シャルリュスは、見せることにおける受動性をよく表わす。その自己表現の方法は、自身の不可侵性を知らしめたいという思いにおいて他者を排斥しつつ、融合・譲渡への思いを同時に持っているのだ。

先に引用したように自らの肩書きを披露したのち、シャルリュスは驚いているヴェルデュラン氏にむかって付け加える。「『でもそれはまったくなんの意味もありません。気になさらずに』と、彼は例の繊細な笑みを再びうかべたが、その笑みは最後の言葉の上で花開いた。『私は、あなたがこういうことには慣れていらっしゃらないと、すぐに分かったんですよ』」(III、333)。シャルリュスにとっては生得である上流社交界での安定した位置にあって、彼はヴェルデュラン氏が社交界への野心を持ち、そこに入る空間的戦略を考えあぐねていることを見抜いているにしても、そのことを彼は、苦しみつつ明晰に見抜く⁽⁹⁾というプロセスをたどって知ったのではない。プルーストにおいて「苦しみつつ明晰に見抜く」という過程に与えられる積極的な意味は、「自己韜晦の愚」の中に、そして「受動と能動の一体性における迷い」の中にある人間のあり方の理解につながるものだ。メロドラマのヒーローの定義は、「最大限の感受性と、最小限の学習能力」とされるだろうが、シャルリュスにおける凝集と拡散の循環としての生理においては、学習の契機は元々ない。しかし彼は殉教者ではなく享樂者なのであって、現実への否定感に駆られているのではなく、因果の逆転する感受性のままに、その生命のある限りの最善をつくして彼は消耗していく。

流動の中にある2極の往来を、バランスをとって社交界に君臨していたシャルリュスであるが、その彼がヴェルデュラン家で催された集りにおいて侮辱を受ける経緯を見てみよう。攻撃の名手である彼の手の内は曝け出され、同時に、不協和音に成り立っていた派手な言説も凝固していく。シャルリュスが受ける意外な侮辱というのは、ヴェルデュラン家のサロンでの事件である(III、814-5)。ブルジョワのヴェルデュラン家のサロンは、シャルリュスが本来は軽蔑するものである。しかし、彼の心を惹く若いヴァイオリニストのモレルとの関わりから、シャルリュスはそこの常連となっている。ところでシャルリュスは、人間が社会層によって異なる反応を見せることを知らない。すなわち、「数人のごく身近な人に知られているにすぎないシャルリュス氏の品行が、彼の生活している環境から離れたところでは、反対にくる日もくる日も散々こきおろされていたのである。ちょうど大砲のある種の響きは、あいだに沈黙の地帯があってはじめて聞こえるようなものだ(III、294)」。

シャルリュスは異質の脈絡に身を置くことになるとは気づかずに、ヴェルデュラン家に出かけていく。しかも、「ヴェルデュラン家で晩餐をするということは、いささかも社交界に行くことではなく、むしろ悪所に足を踏み入れることだったので、初めて娼家に入ってゆく高校生が、その女将にべこべこするように、すっかり怖じけづいて」出かけていった(III、298)。そこで、つねづねシャルリュスに対して悪意を抱いていたヴェルデュラン夫人は彼のお気に入りの青年ヴァイオリニストに入れ知恵をし、人々の前でシャルリュスの意図を歪曲して過剰に暴き告発させる。その時のシャルリュスの反応は、一見すると意外なものである。「シャルリュス氏は黙ったまま呆然とし、わけのわからない自分の不幸を測りながら、言葉もみつからず、目を次々と居並ぶ人の上に、尋ねるような、怒ったような、哀願するようなようすで移していたが、それは何が起こったのかを尋ねるというよりは、どう答えるべきかを彼らに聞いているようだった(III、820)」。悪意に発する巧みな仕掛けは、感情の暴発以上に相手を呆然と

させる。

恥をかかされたシャルリュス氏であるが、たしかに彼は雄弁だけではなく、大胆さのあらゆる手段を持っていたのであり、社交界の人々も眉をひそめるほどの残忍無類の悪罵を用いて、誰かに対して長いあいだ煮えたぎらせていた怒りを、時がくると暴発させるのが常であった(III, 821)。しかしながら、ヴェルデュラン家で屈辱を受けた時には、彼は咄嗟には反応ができなかった。それは語り手の解説によれば、いままで他の場面において彼が強かったのは、「彼の方から先手を打って攻撃を仕掛け、言いたいことを言うからであった(III, 821)」。彼の強みは、憤激を内部で仕立てあげては「神経の発作をおこして人を縮みあがらせる」という、いわば恐怖感情による場の支配の先取りにあったのだ。しかし不意をつかれ、「彼はしらずしらずに、パンの神に追われた妖精たちの恐怖を、古代のギリシャ彫刻が定形化したシエマチックな動作をいくつか繰り返すのみ(III, 821)」であった。

シャルリュスは、いわゆる演劇がかった人物に見える。劇的な構図のなかに身を置いているのだという認識は、その状況を演出しようという願望を人に持たせるものだ。その極端な場合は、対応が自足することにも満足ができない状況であろう。安定を恐れるこのあり方は、漠然として根拠のない自己確認と、断定を執拗に反復する他からくだされる判定との境にある<自分>との折り合いのつけ難さによるのであり、その境目のあり方は、痛みを覚えつつ何度も試すようにと人に求める。しかし、このような執拗な明晰は、いま見たシャルリュスのものではなく、むしろ作家プルーストのものである。プルーストは実生活において、シャルリュスのモデルであるモンテスキウや気ままな社交界の人々の感情の暴発につきあわされたのであろうが⁽¹⁰⁾、このシャルリュスは、見つめ続ける作家の目の前で言葉を失っていく。

しかし、「あらかじめいきりたち、想像力によって怒りを醸成しておかなかった(III, 820)」シャルリュスの不運な落度は、揶揄の対象であるばかりではなく、一種の共感をも抱かせるのである。すなわち、いずれにせよ想定外の状況ではとっさに激怒を湧かたせることのできなかった彼は、「名誉を重んじる人が辱めを受けた場合に持つ、あの普通の反応をもっていなかった(III, 820)」ことになる。ところで、語り手がシャルリュスに対して好意をもっていた理由とは、「シャルリュス氏は敏感で、神経質でヒステリックな、実に衝動的な男だったが、偽の豪傑であり、本物の悪人ではなかった」からだとされる。彼の横暴さは、自律性を持つ他者と攻撃を交わしあう体勢を持つものではなく、自らがそこに浮き立つための状況として設定されていただけだという自己愛的な不徹底さを暴かれはする。しかしまた、自他を弁えたとする安易な言語の常套的な使用で乗り切ろうとはしない者が露呈する不様な対応への共感と理解として、シャルリュスのおぞましきさは、その醜悪な惨めさのままに提出される。なぜなら一般論として、不運に追い込まれた人間は、そしてそれこそが、生の大半の事実であろうが、

どこから、誰が打ったのかもわからない弾丸のように、いささか隕石のように、彼らは(希望を打ち砕いた事件を)こねくり回す。自分に襲いかかったこの異様な武器の構成要素を知り、そこにどんな悪意を認めうるかを知りたいと願う。化学者ならば少なくとも分析と

いう手段がある。原因不明の病気に苦しむ病人なら医者を呼ぶことができる、犯罪事件は余審判手の手で多少とも目鼻がつく。しかし、自分と同じ人間がやる突拍子もない行動は、めったにその動機がつかめるものではない。(III, 821)

人々を震えあがらせる悪罵の持ち主であるシャルリュスであるが、この場において周到に選ばれたイデオロギーの言説をあびせられながら、記憶に原型としてあるいくつかの「シエマティックな動作」を無力にただ反復することによって、消極的にこの経験を彼は受け入れる。そこで彼は、学習するのだろうか。いやただ、体力を消耗させていく。彼は激烈に人を憎むにしても、それは、「彼らに馬鹿にされていると思うからだった (III, 821)」のであり、シャルリュスは先取りした受動性において苛立っていたのであって、生成していく世界を学ぶことはない。

この打撃を受けるシャルリュスを描く前後では、読ませ、楽しませるプールの小説家の本領が発揮される。このあたりに関しては、プールを味わうには理論的な構構的分析などとは無関係に、ただテキストを読むしかないと言わざるをえない。それは、要約が不可能の小説の領域である。とにかく、社会層によって異なって示される、品行に対する反応の言及から、このヴェルデュラン家でのシャルリュスの屈辱の件は語られ始まったのだが、それは幻想的な風合いをすら持つのである。なにしろ、シャルリュスの品行への世間からの非難が引き起こした事件だというのに、「要するに、シャルリュス氏についてあれこれ言われていることは、ことごとく出鱈目だった (III, 295)」という説明のなかで叙述は続くのである。それというのも、シャルリュスと混同されたルプロワ・ド・シャルリュスという悪徳の伯爵がいるのだが、世間の評価には「取り違え」と「確信」が交錯しているうえに、この偽シャルリュスも「なかばは貴族の身分をひけらかすために、なかばは悪徳を隠すために、あえて混同を助長していた (III, 294)」のである。本物のシャルリュスにとって、これは長いあいだ迷惑な話だったが、ついで自分が坂道を転げ落ちはじめると、自分のしたことも自分がしたのではないとも言え、これは便利なものになった。このように、ひとつの事態が「迷惑」だったり「便利」だったりしもすれば、ひとつの事態という「事」の限定性も定かではない人間の猥雑な世界の、これは話なのであるから。

打撃を受けたシャルリュスであるが、癒えていくのも日常内のことである。それゆえ、理知的に貫き通すということはない。彼の軽薄さにしても、以下のように日常的な道具だての中で突きとめられる。すなわち、この屈辱を受けてまもなく彼は流行性肺炎にかかる。「病気は男爵を異常に疲労させたので、ヴェルデュラン夫妻のことを考える余裕はほとんどなかった。(III, 826)」

復讐心は生命力の一部で、ほとんどの場合にはいろいろな例外もあり、それはやがておわかりになるように、同一性格のなかでの人間的矛盾であるが、死期が近付くとたいはいは消えてしまうものである。しばらくヴェルデュラン夫妻のことを考えたのち、シャル

リュス氏はあまりに疲れたので壁の方に体を向けると、もう何も考えなかった。彼は雄弁の才を失ったのではない。雄弁が彼に努力をあまり要請しなくなったのだ。雄弁はなお、こんこんと湧いていたのだが、その質が変わってしまった。彼の雄弁はしばしば激情を修飾したのであるが、いまは激情から離れ、おだやかな言葉、福音書の言葉、一見して死の諦めとも思えるものに飾られたほとんど神秘的な雄弁でしかなかった。ことに助かったと思った日にはよく喋った。ぶり返すとまた黙ってしまう。(III, 826-7)

シャルリュスの発話の量と質は、きっちりと生命力の量と質と相関するという単純さを見せるのであり、そこにあるのは生命をめぐる存在の倫理ではなく、有効性の物理学である。

彼は大天使ガブリエルに訴えて、いつになったら救い主が現われたもうのか、かつて予言者に告げたように自分にも教えてくださいと祈った。しかし、彼はしずかな苦痛の微笑で祈りを中断すると、「でも、大天使がダニエルにいわれたように、私にも『7週間と62週間』我慢せよといわれては困るね。私はそれまでに死んでしまうからね」と言った。彼がこんなふうに使っていたのはモレルであった。だから彼は大天使ラファエルに、モレルを息子トビのように連れ戻して下さいと願ったのである。(III, 827)⁽¹¹⁾

彼の祈りの脈絡は現実生活の脈絡に移されることで、殊勝な外観のもとにある巧みな計算と情緒的な耽溺を暴きだす。さらにはシャルリュスは、病気の法王がミサをとり行なわせつつ、医者と呼ばせるのも忘れないように (III, 827)、人間的な手段もおりませず聖書の逸話を引き合いにだしながら見舞い客に実際的な協力要請をほのめかす。しかし、この状況のなかでも、

シャルリュス氏の言葉の精神の純粹さは、それにもかかわらず美しくなっていた。虚栄心も中傷も、狂的な悪意や傲慢も、すべて姿を消してしまった。精神的に言うと、シャルリュス氏は最近までとどまっていた水準を、はるかに抜いていたのである。(III, 827)

情感の充溢をその流れにおいて支えもする物語性は、逆らわなければ読者を一方向へと運んでくれる。ところがシャルリュスにおいて、このように高められた精神のあり方を左右するのは、病気と同等に作用する「身近なこと」のいろいろである。そしてこの精神的完成は、完成のために作用した病気が治ると一緒に消滅する。「シャルリュス氏は、やがてわかるように次第に速度をはやめながら、もとの斜面を降っていった。ヴェルデュラン夫妻の態度は、いまはやや遠い追憶にすぎなくなり、もともと身近な怒りがその再現を妨げることとなった (III, 827)」。

ここには「真実の体系」という広大な思想と、「病気と同等に身近なこと」の実効性が、実寸大の人間の中に読み取られている。なんとという軽薄で必死な情熱によって、人は生きる脈絡を見つけることか。上記の引用のあと、文脈はまったく別のところへとつながる。すなわち、これに続く文章は段落を変えて、「話をヴェルデュラン家での夜会に戻すと、この夜ヴェルデ

ユラン氏は(…)」となる。「何か別の身近な怒り」とは、要するに記す必要もないことであるままに、人の視野の全体を占める緊急事でもあるのだ。

④ナルシスの凝固、蕩尽、生理の論理

測られ、謀られているのではないかという意識が、仕掛けへの欲望を刺激する。そこで人は、他者を自由にはならない小道具として用い、見果てぬ相対のあり方を試すことになる。完結を見ないこの試行は、まるで全体を遠くから見張るものの促しをうけているかのようなのである。それをロマン主義の脈絡で考えるならば、「理想の人」の誘いに応じて永遠を思うという構図であろうが、シャルリュスは自身こそがミューズであることを求める。そこでは、自分の側に対応が可能な体力があるかぎり、狂暴に試行は続くだろう。自分の外に見張りともなった眼があるとき、仕掛けの失敗を自分で目撃したいという誘惑は探求の一姿勢でもある。至高でしかないミューズに帰依する探求であるならば、放浪と失敗は宿命であり、報奨でもであろう。ヴェルデュラン家での当惑せざるをえない場面において彼が見せた「定形化されたシエマティックな動作」とは、対応不可の印であって、皮肉（無視）や暴力や発作的な反応には向かいえなかった彼の、人間的な反応ではある。しかし、この凝固を病いの回復とともに乗り越えたシャルリュスは、生命力自体の蕩尽へと向かっていく。

シャルリュスが次に物語に登場するのは、2年後の第一次世界大戦下、ドイツ軍の空襲にそなえて灯火官制がしかれているパリ（1916年）の街角においてである。語り手が見かけた、柔らかな中折れ帽に長い外套のでっぱり太った男がシャルリュスだった。

シャルリュス氏はまた、自分自身から可能なかぎり遠くに達してしまっていた、というよりも、彼がそれになってしまったところのもの、彼ひとりには属していないもの、他の多くの性倒錯者に属しているもの、そういったものによって彼自身が完全におおい尽くされているために、私は最初の瞬間、大通りの真中であのアルジェリアの兵士たちのうしろに、シャルリュス氏ではない、大貴族ではない、想像力と才気に恵まれた人ではない、彼らのなかの一人を見たように思ったのであって、男爵との類似といっても、ただ彼ら倒錯者のすべてに共通で、いまやシャルリュス氏にも見られるあの様子しかなく、その様子は、すくなくとも彼をじっとよく眺めないと、全てをおおいかくすのだった。(IV, 343)

ここで、シャルリュスを語るのは全能の視点、すなわち、すべてを見通す視点である。一つの肉体としてのシャルリュスが、内的、外的、本来的、現時点的、類型的といった諸相において言い換えられている。下線部がそれらを示す。そこで突出している〈現実的な印〉とは、「彼ら倒錯者のすべてに共通のあの様子」である。視覚的な常套句の摘発をシャルリュスは許しており、生身のシャルリュスが典型を生きている。そのあり方は、戦争による破壊から守るべき文化遺産について、このパリで目撃された同じ時期に語り手と語るシャルリュスのバランス感覚からは遠いものである。シャルリュスの戦争論は、挿入される語り手の意見（プルースト自

身のものとして)とも協和して、次の段落において見るように興味深いものであるが、それは当然ながら独立した戦争論としてあるのではなく、作中人物の運命と関連する内容として提示されている。

つまりシャルリュスにおいては、明晰さと同時に、その論理には生理が引きずりこまれるのである。すなわち、戦争という、「愛国心」という化物を介在させる論議の根底には<当事者という幻想>を介する思考が見届けられるものであるが、シャルリュスの戦争論は<当事者というもののエゴの狭さ>を暴きながらも、一方では彼には抑えることの出来ない、ひたすらつとめてくる激烈な怒りの生理によって対象関係が失われもするのだ。

そのことが象徴的にあらわれる議論がある。シャルリュスと語り手は、歴史的な建造物のみならず、無数のフランスの小村を教訓ゆたかで魅力的なものにしているたたずまいの全体が戦争によって消滅していることを語りあう。アミアンの大聖堂についてシャルリュスは、「あその聖フィルマンの振り上げた腕は、いまでは壊されているんでしょうかね。もしそうだとしたら、信仰と力のこの上もなく高らかな肯定がこの世界から消えたことになる」と言い、語り手は答える。「消えたのは、その肯定の象徴ですよ。私もあなたと同じように、ある種の象徴が好きです。でも象徴のために、それによって象徴される現実を犠牲にしたら馬鹿げているでしょう」と(IV, 374)。これに対してシャルリュスは「あなたのおっしゃることはわかります」と答えるのだが、その人生の流れにおいて、彼は、彼の現実を財として、その象徴に殉じるともいえるのではないだろうか？

しかしまずは、第一次大戦の戦局に対する分析において、シャルリュスの思考作用の凝集がとぎれることのない広がりをもつ例を見てみよう。語り手にシャルリュスは語る。

フランスにはもう勝利が約束されているとあなたはお考えのようだ。私も心からそれを願っています。この点はお疑いのないように。ただ、是非はともかく、連合軍が勝利を確信してからというもの、(私としては、もちろんそんなふうには解決すれば大喜びですが、ただ私の見るところ、とりわけ多いのは机上の勝利、ピュロス⁽¹²⁾ばりの勝利で、それがどんな代償を必要とするかはわれわれに知らされていないのです)、またボッシュ⁽¹³⁾がもう勝利に確信を持たなくなって以来、ドイツは平和を促進しようとつとめ、フランスは戦争を長引かせようと努めているのが見て取れます。(…) 真実は、毎朝あらたに宣戦布告がなされているということです。したがって、戦争を続けようと思う者は、戦争を始めた者と同じくらいに罪がある。いや、もっと罪があるでしょう。だって最初に戦争を始めた者は、たぶん戦争のすべての惨禍を予想してはいなかったでしょうから。(IV, 375)

これは、宇宙的な調和への感性といえるだろう。しかし、その根底にある地上的な怒りは、やや過激である。なぜなら、シャルリュスの基本的な理解では、「どこの国でもいちばん数が多いのは馬鹿者である。もし彼がドイツに住んでいたら、愚かにも情熱をこめて不正な立場を擁護するドイツの馬鹿者たちにすっかりいらいらしたことは、疑いの余地がない。けれどもフラ

ンスに住んでいると、愚かにも情熱をこめて正しい立場を擁護するフランスの馬鹿者たちが、やはり彼を苛立たせるのであった (IV, 354)」ということだからだ。この苛立ちの正当性は疑いようがないにしても、彼はいつでもどこにいても苛だっていることになる。すなわち、「いずれにしても、フランスがもう敗れるはずがないことは確かだったし、反対に、飢饉に苦しむドイツがおそかれ早かれ屈伏しなければならないことも、彼には分かっていた。このような考えが彼にいつそう不愉快なものになるのは、やはり彼がフランスで暮らしているという事実のため (IV, 354)」だったのである。公平 (正) さは、その抽象的な身体によってすらも場を占めない当事者によって示されるのだろう。

シャルリュスにおける、現実に対して拡散する対応と、一方での象徴へと凝集する対応は、彼の体感としての論理ともいえるものであり、その基本には身体感覚が示唆される。つまり、「バイエルン公爵夫人を母に持ったということもふくまれるが」、シャルリュスは「愛国心を持っていなかったのである。したがって彼は、フランスという身体にも、ドイツという身体にも属していた (IV, 353)」。この、身体と心と地理をからませた比喩的な表現を有効とするという根拠において、ある国が平和を望むと宣言する時の嘘と企みを見抜く本能は、語り手においてはアルベルチーナやフランソワーズと一緒に暮らして、「言葉とはまるで裏腹の判断や計画が形成されるのを見てきた」ことによってついたとされる。しかし、この経験がいたりつくのは、「当事者でなかったら」という想定は想像の域をでるものではないということである (IV, 353)。思考 (反応) 単位としての個別体の一体性は、本来、幻想なのである。

動物の身体、人間の身体というものがあるように、つまりは一つひとつの細胞に対してモン・ブランのように巨大な細胞の集合があるように、国家と呼ばれる個々人を組織した巨大な堆積も存在する。その生活は、それを構成する細胞の生活を拡大して繰り返したものにすぎない。そしてその細胞である個々人の生活の神秘、反応、法則を理解できない者は、国家間の闘争を語るときにただ空虚な言葉しか口にしえないだろう。しかし、もしも個人の心理を完全につかんでいるなら、個人の集積であるこの巨大な塊、真っ向から対立しているこの二つの塊は、単に二つの性格の衝突から生まれた闘争よりも強力な美を帯びるだろう。(…) そんなふうにし少し前から、多様な形をした幾百万という小さな多角形で周辺まで満たされたフランスという巨大な存在と、いつそう多くの多角形で満たされたドイツという存在が、互いにいがみあっているのだ。(…) たとえ個人を見るような観点で眺めても、それらはやはり巨大な集合体だから、争いも壮大かつ豪華な形をとるのであった。(IV, 350)

そこで、個体シャルリュスの多層性がいかなるものかを見ていこう。戦争という集団的な狂熱のなかで維持されるシャルリュスの知性、そして周りに同調せず「ドイツ好み」を通す強さは、彼の固有の生、すなわちその社交生活から来ている。なぜなら彼の理性は、彼が直接に接触をもった社交界の人々、つまり、尊敬すべき、名誉を重んじる人々の繊細さと冷酷さを知り

ぬいていたからであり、「ドストエフスキーの何人かの人物のような欠陥のあるならず者のほうが、彼らよりすぐれている場合のあることを承知していた (IV, 355)」からである。だが、このシャルリュスの経験知の正当性に、ブルーストは語り手の立場で意地悪く疑義をはさむ。「しかし私にはどうして彼が、ドイツ人をこういう欠陥のあるならず者と同一視したのか、いっこうに合点がいかなかった。嘘が、策略があるからといって、それだけで優しい心をもっていと決めるわけにはいかないし、またドイツ人が優しい心を示したとも思えないからである (IV, 355-6)」。怒りに一旦身を預けると発作にまでいたるシャルリュスの判断は、熱烈な正しさを持つ一方で、このような皮肉を正当に受ける程に、時には因果が逆転する滑稽さを含む例として示されているのだ。そのシャルリュスの危うさは、さらに露呈されていく。

新聞が、「追い詰められ無力と化した野獣」といった、ドイツを見くびった表現を用いて、その「無頓着で残忍な愚かさ (IV, 355)」を見せることに対して、「呆れたことに、大衆はこんなふうには戦争にかんする事実や人物を新聞だけで判断しているくせに、自分で判断していると思ひ込んでいるのですね (IV, 367)」と憤慨するシャルリュスの指摘は正しい。しかし、ここにこめられた彼の嘆息は押さえがたく激しく、「戦争がシャルリュス氏にとって、憎悪を異常なまでに豊穡に栽培する機会 (IV, 355)」となったことは、彼が踏み誤る契機ともなった。彼の内に「瞬間的に生まれる憎悪は続かない」にしても、その間に彼は「ありとあらゆる暴力に身をゆだねかねなかった」(IV, 355) のだ。彼の突発的な行きすぎの準備は、常に整っている。そして、この苛立ちは不幸である。なぜなら、それを治める手段は少なく、シャルリュスの取りうる解消策は深く暗い脇道へと入っていくからだ。

すなわち、大通りでひどく声をはりあげて「敗北主義」を語る彼を振り返るものもあるなかで、その「大演説は通行人たちへの軽蔑のしるし (IV, 378)」でもあったのだが、同時に、彼が通るのにつれて「暗闇からいくつものあやしげな人影があらわれ、彼からすこしはなれたところにたむろするのだった (IV, 378)」。薄暗い脇道に入りこんだ男爵は、そこで大通りから流れこんでくるさまざまな兵士たちの「華々しい軍服姿に見とれる」。パリは、「画家が単にさまざまな色にきらめく多種多様な衣装を寄せ集める口実としていくつかの建物を描いたにすぎない書き割りのように、非現実的なものになっていった (IV, 379)」。そこで夢想を押しつけられる現実には、報復するだろう。世界内にあるゆえの因果は、逆転もしつつ残酷なのである。

「シャルリュスの場合、快樂にはかならずある種の残忍な観念が伴っていた」のであり、「彼には、自分の愛している男が、快い死刑執行人のようにみえる (IV, 356)」のであった。パリの町かどで見かけたシャルリュスの姿に惹かれて後を追う語り手は、彼の後について男色宿に入る。語り手がさ迷うこのパリには『千夜一夜物語』の東洋が重なり、語り手は「入り組んだこのくらい道に少しづつ迷い込みながら、バクダッドのさびれた界限に冒険を求めにゆく回教王ハルン・アル・ラシドのことを考えていた (IV, 388)⁽¹⁴⁾」。シャルリュスは男色宿でベッドに縛りつけられ、プロメテウスのように (IV, 417) 自らを鞭打たせる (IV, 394)。人間の発明の創造には常に不幸が伴うというのが、人間に文明を伝授したプロメテウスの考えであるが、シャルリュスは自らの欲望の執拗な嗜好を、ちやちやな仕掛けにおいて自らの演出によって

満足させようとする。ジュピヤンはシャルリュスの気に入るだろうと考えて、男たちの紹介を工夫する。「牛乳屋の小僧ですが、でも実を言うと、こいつはなによりもベルヴィルでもっとも危険なならず物の一人なんですよ」。そして彼は、「まるでこうした説明ではまだ不十分でもあるかのように、なお若干の『引用』を付け加えようとする。『こいつは窃盗と別荘あらしで何度も有罪になってます。通行人と殴りあいをして、相手を半殺しの目にあわせて、フレーヌの監獄に入れられたんですよ。アフリカの囚人部隊⁽¹⁵⁾にもいました。自分の隊の下士官を殺したんです』(IV, 396)」。

人間の性衝動は〈ファンタスムの秩序〉にある⁽¹⁶⁾とできるが、〈事実〉や〈他者〉の認識も、それとどれほど違うと言えるのだろうか。そしてプルーストは、「快樂や悪徳ほど限定されたものはない (IV, 406)」と言う。その凡庸さに翻弄されるおぞましき。「恐怖の度合いは、それが考えさせる危険に対応するのではない。眠れないことに恐怖しても、深刻な決闘には怯えず、また、ライオンに怯えないで、ねずみに怯える (IV, 413)」と言うプルーストによって、ファンタジーの意味作用の恣意性は、深刻に、そして滑稽に描かれていく。

この男色宿の場は、要約すれば青酸な場であるのだが、非現実的な不自然さに満ちている⁽¹⁷⁾。男色宿で彼に乱暴を加える若者に、忌まわしい〈物語〉を帯びていることを要求するシャルリュスは、みえすいたロマネスクな身上話を求める。「こんなことを言ってくれるなんて、いい奴だね。それに、なんてうまく言ってくれるんだ。まるで本当みたいじゃないか。要するに、これが本物かどうか、どうだというんだ。だって私にうまく信じさせてくれたじゃないか (IV, 404)」。自らが組み入れられたドラマに単純で典型的な虚構を求める姿勢には、分断された形での恣意的な凝集が連続している。原形に凝集していく演技は、わかりやすい表現である。こうして多重に仮構された場で、シャルリュスは一時のやすらぎを得る。彼がパメラ・ラ・シャルムーズと呼ばれるこの場の人間関係には、社会層も国籍の区別もないという幸いが確かにある。見果てぬ夢である充足した物語の可能形が、瞬時の幻想の中に生きる。

この閉ざされた館でのシャルリュスの肉体を賭けた戯れは、彼における figure 文彩との感覚に賭けた戯れに対応する。彼にとって、たとえばキリスト教のイマージュは完全に現実としてある。彼は天使とやり取りをする (III, 827)。ちょうど、『失われた時を求めて』の冒頭で語り手である少年が全身で一喜一憂しながら幻灯 (I, 10) に映し出される物語に向いあったように。さらには、村の教会に伝わる石に沈んだランプの伝説⁽¹⁸⁾において、読者が幼い主人公と同一化してそれぞれ「そうある」と現実感の確信を持ったようにシャルリュスは戯れる。しかし大人になると、そこには「曖昧な代用品」という操作性がついてまわるのであって、欺瞞を導きいれてその欺瞞を処理する作業を負うことにもなるのだ。

このちやちさは、それでも「転換の技法」とも呼べるものであって、シャルリュスが自らのものとしていた精神的な力である。彼は現実と幻想において同等にもてなされたいと願う空想家の境位を生きるといえる。ジャン・ルッセは「バルザックを愛読する人間は、現実と芸術の混合、いわゆる『美的偶像崇拜』におちいりやすい」とする⁽¹⁹⁾。「男爵は、たいへんな芸術家であった。だから少し前から自分のおかれた状況とバルザックの描いた状況を重ねあわせて、

今ではいわば小説のなかに逃れていたのである。おそらく彼をおびやかし、恐怖感をも与え続けていた不幸においても、スワンやサン＝ルーだったら『とびきりバルザック的』とでも呼んだであろうものを見いだすという慰めを自分の不安に見いだしていた(IV, 445)」。そんな彼の例を戦闘的にセンチメンタルだと思えるにしても、「シャルリュス氏とモレルの関係のなかには、だれか女優を囲うときの自己満足のようなものさえ、ひと役買っていたように思われる(IV, 446)」という、私たちの日常的な意味のひき付け方に比べて見ると、私たちが日々自らを明け渡している現実感の領域も、相当にファンテジストなのである。

さらに、モレルと決裂する前のシャルリュスの戯れの例である。彼は、豪華本に蔵書票をつけてモレルに送るのだが、それらの蔵書票の言葉とは、いまや歴史となった彼らの物語の記念碑としての詠嘆であった。「不幸な恋の好む感傷的な技工はさまざまに文句を変え」て述べられるのであり、それらは外から命名を呼び込む方法であった。「わが希望」、「期待を裏切ることあるまじ」といった信頼をこめたものに加えて、「われは待たん」、「主人と同じ快樂を」、そして「わが望むものは不滅なり」がこれらの蔵書票にはあった(IV, 453)。

すなわち、シャルリュスは超脱の現実主義者ということなのだ。そして、ちゃちともいえるこの信の体系に基づく戯れは、〈中心〉という観念を持ち込むことなく人間を捉えることでもある。それは柔軟な力ではあるのだが、そこに失われている〈中心〉は、ある対応の形を固定していくものでもあるだろう。すなわち、行動というものから道徳を切り離す習慣をつけたシャルリュスにおいて、「習慣はもう絶対に道徳的な感情に見解をたずねようともせず、日々ますます深刻化して病気の-new段階にはいつていつた(IV, 417)⁽²⁰⁾」ということなのだ。

追われるように好みの物語を反復して演じるシャルリュスは、傷ついた身体で醒めるという、予期した不幸を味わう。実にちゃちな戯れはちゃちに終わる。この男色宿において彼に向い合うのは、実直な労働者であり、家族思いの愛国者であり、契約にのっとった残虐行為を履行する生真面目な人たちである。若者たちは、「教えられた課業を暗唱するように(IV, 396)」彼に悪態をつく(IV, 406)。

青年モーリスは失敗し(IV, 405)、ファンタスムの単純な筋をシャルリュスに見せてしまう。「背徳的なもののわざとらしい努力は、馬鹿馬鹿しさと愚直さを呈するのみで(IV, 406)」、悪者ぶった芝居の愚劣さと無邪気さががっかりすると同時に、シャルリュスは腹をたてもする。結局、男爵は白けてホテルをあとにする。先にすでに引用した「快樂と悪徳ほど限定されたものもない」に続けてプルーストは言う。「この意味において、表現の意味を変えて、人は常に『同じ悪徳の輪をぐるぐる回っている』といえる(IV, 406)⁽²¹⁾」。「同じ悪徳の輪をぐるぐる回っている」ということは、「悪循環において生きている」と言い換えられるだろう。その循環において、夢見る束の間の演出に埋没しようとしたシャルリュスであるが、やがて身体の不如意にとらえられると同時に、卑屈な言語使用に追いこまれていく。

⑤名を名乗らない者の語り方

物語の最終部で、ゲルマント大公夫人邸の午後の大演奏会にむかうとき、語り手は、車から

下りようとするシャルリュスを見かける。卒中に見舞われたのちの彼は、「車の奥に、座っているというよりもむしろ安置されたような格好で乗っていた (IV, 437)」。置かれた場にただあったシャルリュスは、その後、大公夫人邸では「地上のはなやかな権勢欲、あらゆる人間の尊大な誇り、そうしたものの哀れな末路を語るように」、かつては馬鹿にしていた人にむかって、病人の誇張なのか、神経や脳髓の混乱からの不均衡なのか、「すべての階級意識を転倒するようなお辞儀を誰かまわすしていく (IV, 438-9)」。身体の不如意において、彼の見せるこのような態度は、制御を越えた機械的で無意味な反応なのだろうか。それともやはり、何らかの選択を経てのことなのだろうか。

シャルリュスの知能は完全に保たれていたと語り手は判断するのだが、彼が陥った言語不随において、彼は会話のなかで瞬間的に声の力が増し (IV, 440)、ある種の言葉を発音できなかったり、まちがった発音をしたり (IV, 441) し、抑鬱症の発作においては、普段は隠している考えを大声で告白するようになる (IV, 443)。言語の乱用・濫用とは、<私>を翻弄する<私>の乱用・濫用である。しかし実は彼においては、「もともとそこには、二人のシャルリュスがいたのだった (IV, 438-9)」。

二人のうちの一方の知的なシャルリュス氏は、絶えず自分が失語症になりかかっていると嘆いており、ひとつの語、ひとつの文字を、しじゅう別のものと取り違えて発音しているところばし続けていた。しかし実際にそのようなことが起こるやいなや、すぐさまもう一人のシャルリュス氏が顔を出す。これは潜在意識のシャルリュス氏で、知的なシャルリュス氏が憐愍をそそろうとするのに対して、こちらは羨望をかきたてようとし、前者だったら軽く軽蔑するような媚びさえ身につけている。この潜在意識のシャルリュス氏は、まるで楽団員がもたつくのを見てとったオーケストラの指揮者のように、出だしのところでただちに演奏を停止させる。そしてきわめて巧妙に、次にくるものを最初に言い出しかけた言葉につなげるのだが、それは実は言い違えだったのに、まさに選ばれて口にされた言葉のように見えてくるのだった。(IV, 440)

大いなる状況に生きるとき、自らに対する憐愍を持つ知性⁽²¹⁾において、人は状況内の自分を受け入れる。羨望を起こさせたいという媚びを求める人間は、別のことに身を託すことによって小状況を生きぬく。シャルリュスの至った不如意のあり方は、私たちの言語使用の外面を繕う形にあらわされるにしても、それはまさに、操作されるがままにあるという、私たちの言語使用の常態を示すとも言えるだろう。言語は人を建て直し、そして失わせもする。そしてまた言語とは、社会的な存在である人間のための社会的な道具である。孤立して生きられない人間は、媚びを売ってでも他者を求める。傲慢で通っていたシャルリュスの探求も共感を必要としていたのであるが、体勢を整える余裕を失った限界点において語り手が見抜くシャルリュスの下手な芸当は、『失われた時を求めて』の読者には、その境地から遠くを目指すプルーストの文学と言語のあり方を考えるようにと誘うことだろう⁽²²⁾。

ブルーストは、ボードレールの失語への恐怖を語り⁽²³⁾、真の苦しみのなかで明晰さをもつには、失語症におびやかされるほどの苦悩を人は持つとする。求められるべき言葉はどこにあるのだろうか。ゲルマント公爵夫妻の帰宅を待ち構えていた語り手は、偶然にシャルリュスとジュピヤンの密会を目撃する。「蘭」と「蝶」のように戯れあう二人の眼のなかに、「その名をいまだ類推しえないどこか東洋の町の（…）青い空（III, 7-8）」を語り手は思う。この表現は、「l'amour qui n'ose dire son nom⁽²⁴⁾自らの名を告げえない愛」という表現を思わせる。名づけることを恐れる、起源をあきらかにしえないほどの執着である。ファンタスムの道に迷う人間の言語を見極めるブルーストの文学をさらに続けて考えていかなければならない。

注

テキストは、Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Gallimard, Pléiade, の4巻（1988、1988、1988、1989）を用い、引用は、巻数（I, II, III, IV）とページ数で示した。日本語訳には、『失われた時を求めて』鈴木道彦訳、集英社、全13巻（1996-2001年）を大幅に参照させていただいた。

- (1) シャルリュス男爵のモデルとなったロペール・ド・モンテスキウ伯爵 (Comte Robert de Montesquiou-Fezensac 1855-1921) に、ブルーストは22歳で出会った。伯爵は37歳であった。彼が『名士年鑑』(1909年)にみずから執筆した略歴には、以下のようにある。「ヨーロッパ貴族階級の重要な一門の血をひく。先祖には、歴代フランス元帥あり。ブレース・ド・モンリュック、ジャン・ド・ガシオン、ピエール・ド・モンテスキウ、サウォワ地方の征服者アンヌ＝ピエール・ド・モンテスキウ、ダルタニャン（『三銃士』の主人公）、ルイ十八世の大臣をつとめたモンテスキウ神父、ナポレオンの副官A・ド・モンテスキウたちである」(Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust, biographie*, Gallimard, 1996, p. 195. 『評伝ブルースト』吉川一義訳、筑摩書房、2001年、170頁)。同書には、「伯爵は、生涯にわたり、ちっとも両親が好きになれないと言明していた。それとは逆に先祖なら、『親戚とはいえ、血縁者同志のなれなれしい親密さが無い』ので、伯爵も『大好き』で、おのれの美点はすべて先祖のおかげだと考えていた」ともある (*ibid.*, p. 195-6. 同上書、170頁)。モンテスキウ伯爵は、回想録、詩集、評論を残している。

以下に複写した2枚の絵は、ジャン・ボルディーニ (1842-1931) による『モンテスキウ伯爵の肖像』と、エル・グレコによる『枢機卿フェルナンド・ニーニョ・デ・ゲバラの肖像』である。後者とのシャルリュスの関わりとしては、怪しげな男につきまとわれながらバリの町をうろつくシャルリュス男爵が、「相手がずうずうしく声をかけてきはしないかと怖れて、黒くぬった睫毛をうやうやしく伏せていたが、そんな睫毛が、おしろいをぬった頬ときわだった対照をなしているのは、エル・グレコの描いた異端審問所の大法官そっくりだった (III, 712)」と描かれている。

この「異端審問所の大法官」については、1987年に出た井上究一郎による日本語訳と、1991年にシャルトル美術館で開催された展覧会「ブルーストと画家たち」のカタログが、これはエル・グレコがトレドで描いた肖像画のひとつである『枢機卿フェルナンド・ニーニョ・デ・ゲバラの肖像』だと指摘している。しかし、「エル・グレコ研究の現状では、この肖像画のモデルは、むしろ枢機卿ベルナルド・デ・サンドロバル・イ・ロハスだとする説が有力になっている」(吉川一義『ブルースト美術館』筑摩書房、1998年、215頁の注による)。いずれにせよ両者は、自らの魅力にかまけるダンディと、断罪する権威の権化の肖像といえるだろう。

これらの2枚の絵の間の差異を、次のブルーストの言葉において理解しよう。「この本の中には、虚構でない事実はひとつもなく、『モデルのいる』人物はただの一人もおらず、全ては私が証明の必要のために創りだしたものだ (IV, 424)」。『人間』を証明するために創りだされたシャルリュス男爵とは、2枚の絵の間を移行していく人物でもあれば、2枚の絵が重複する人物でもある。つまり、ボルディーニによる肖像の端正な横顔においては彼の視線は何えないのであるが、それは実は、エ

ル・グレコの絵の威厳のある外観の中で、左右の手が示す緊張度のばらつきと、かすかに開けられた唇が明かしているところの警戒心に溢れる横目であるということなのだ。

- (2) charmeuse de serpent で「蛇使い」。charmeuse は、魅惑的な人となる。
- (3) シャルリュスに関して論じられるテーマは、広く他の作中人物にも関わってくる。

「名」：この人物の名が Charlus となるまでには、Fleurus や Gurcy が草稿では使われている (*Correspondance Proust/Gallimard*, Gallimard, 1989, p. 18)。作中人物の中には、Charlus となった彼に音の類似から重ねられるものが2人いる。シャルル・スワン (繊細な感性を持っていたが、芸術にたいしても、後に妻となるオデットにたいしても、怠惰で我儘な鑑賞者であった) であり、シャルリュスのお気に入りのヴァイオリニスト、シャルル・モレル (仮託された理想美・善を演じるようにと要求されるモレルとはシャルリュスの分身であって、シャルリュスは、生きた対象関係を回避するといえる) である。また、語り手の友人でシャルリュスの甥のサン＝ルーも、1913年の原稿ではシャルルであった。

ブルーストは書簡において、一人物の造形にかかわる複数のモデルの実在を語っている。「この本の人物にはカギはありません。というか、一人物に8人から10人のモデルがいるのです。コンプレの教会に対しても記憶にある多くの教会があったように (*Correspondances, XVII*, Plon, p. 193, 1918年4月20日)」。一方、先にみたように、「この本のなかには、虚構でない事実はひとつもなく、『モデルのいる』人物は、ただの一人もおらず、すべては私が証明の必要のために創りだした (IV, 424)」と言っている。作中の1人物内の重層性はまた、その他の人物のそれとも往来するのであって、ひいては、作者ブルーストをも交えた交錯において、全てがひとりの人間に集約されるといえるだろう。

また、欲得ずくでサン＝ルーに近づく女優ラシェル Rachel の名は、同様の理由でシャルリュスと関わるモレル Charles Morel のアナグラムと言われる (Michel Erman, "La poétique des personnages proustiens", in *Poétique*, no. 109, février, 1997, Seuil, p. 390)。生命力の交換としての人間関係も、究極は一人物内の動きに重なる。

「関係性」：シャルリュスが持つ人間関係が秘める束縛・従属性の「魔と甘さ」は、その他の関係においても類似点を見ることができる。まず、シャルリュスとモレルであり、「語り手とアルベルチーヌ」、「語り手と祖母・母親」、「シャルリュスとジュピヤン」、「スワンとオデット」の関係である。そこには、同類性、庇護、執着と離反のテーマと、愛情と金銭による束縛がともなう。シャテルローと従僕 (III, 37)。ゲルマント大公とモレル (III, 464)。ニッシム・ベルナルとボーイ (III, 236) もここに加えうる。そしてそれらは、『失われた時を求めて』に見られる全ての関係でもある。

「テーマ」：「愛情は裏切られる」という形も、これらの関係に共通し、「La violence affective 情動的な暴力」の支配という表現をも誘うことになる (Erman, op., cit. p. 407)。たとえば、ヴァントウイユ嬢とその女友達が、前者の父親からの愛情を踏み躪ることによって二人で演じるサディスティックな場面が語り手によって目撃されるのだが、巻が進んでのその日の想起 (III, 499-500) においては、「そうした過去のモンジュヴァンでの邪悪なイメージがかくも長く自分のなかに保存されていたのは、祖母を見殺しにした罪であるのではないか」と述べられる。求め続ける愛情という執着が、「邪悪さ＝人を殺す」につながることに於いて、密接な従属関係における一方の崩壊は、その痛ましさをメランコリーを「永遠の今という過去」として残すことにもなる。これは、(注21)の「倫理の無時間性」につながる主題である。

そして一方には、「従属の優しさ」が語られる。物語が進んで、かろうじて失明をのがれたシャルリュスであるが、脳卒中の後遺症で身体は不自由となる。この彼に片時もはなれず世話をするのが、同性愛の相手ジュピヤンである。生涯を通して献身に包まれていたブルーストには、召使たちに対する優しさが証言されている。

- (4) シャルリュスは、「できることなら名前も含めて、モレルが一切のものを自分から受けているようにしたい」と思い、モレルの名を変えさせようとする。彼が提案したのは、二人の逢引きの場所をも密かに暗示する「シャルメル」という名であったが、モレルは拒否する (III, 449)。

(5) ユクセル元帥 (1652-1730)。侯爵。サン＝シモンの『回想録』の1703年の項目に、若い仕官に言い寄り、また傲然としていて面倒くさそうに椅子から立ち上がろうともしないユクセル元帥の肖像がでている (鈴木道彦訳『失われた時を求めて8』523頁の注)。

(6) この箇所テキストの問題とは、版によってテキストが異なることである。「もともと、主な違いはテキストの配列からくるのであって、字句そのものはほぼ同一である」と言えるのだが、本稿では、1988年に出版された新プレイアード版を使用した。同書は、従来の諸版の拠っていた「第三のタイプ原稿」と呼ばれる資料、すなわち、1923年の初版刊行のさいに、すでに亡いブルーストに代わった校訂者によって整理され並び替えられた資料には拠らず、新たに国立図書館が入手した別資料に拠っている。この資料の採用に対しては批判がある (『新資料についてはほとんど説明がなく、(…)内容的には、後から登場するはずの人物にとつぜん何の説明もなく言及するなど、混乱が甚だしい』、『失われた時を求めて9』鈴木訳注、369頁)。しかし、本稿がこのテキストを選択したのは、「私たちはだれしもこの世界を真実と思っているが、それは各人にとって 異なった世界である」という記述の、「唐突な配置」ゆえである。新プレイアード版と同じ資料に拠っているのは、リーヴル・ド・ポッシュ版であり、鈴木訳が採用した旧プレイアード版の配列をとるのは、フラマリオン版、ロベール・ラフォン版である。

新プレイアード版の編者は注として、以下のとおり記している。「マルセル・ブルーストの構成法をここに見ることができるとしよう。まず、簡略な言説『私はこの日知った(…)』がある。ついで、医療に関して展開される付加事項。ついで、回想としての『ベルゴットはもう何年も、家にひきこもっていた』がくる。これに続くのは、『それに』によって導入されることの多い新規の付加事項で、ここでは、『それに、彼はかつて一度も社交界を好んだことはなかった』である。最後に、加筆ノートに書き込まれた断片によってふくれたもとのテキストの残りがくる。それには分析が続くのであるが、そこでは、想定された各語が定義を受け、疑問には可能な答えが与えられる (IV, 1738)」。

(7) このテキストは、本稿がその第3部をなす「『失われた』発話を見いだす1」においてすでに引用されている (神戸女学院大学論集、2000年12月、107頁)。そこにおけるテキストの解釈は、以下の通りである。「同性愛者のメッセージは迂回した伝達を図り、発話主体を『AであってAでない』という形で押し出し、受け取り手に対して、判断保留を含んでの受諾を要請するという特異性を見せる。(…)『失われた時を求めて』は、幾つかの規則違反を含むにしても『一人称小説』である。ゆえに上記の文章は、当惑する語り手＝主人公 (一人称) の推論として妥当ではある。また、その推論の執拗な滑稽さは、この時点ではどうみてもシャルリュスが『不審な男』でしかないゆえに、自然ではある。ところが、この『不審な男』としてのあり方においてこそ、シャルリュスという人物の立体的多様性を描く方法があったのであり、またこうして、彼の情熱が滑稽なほどに意識的であることが描きとられるのだ。この初登場での『あり方』(読み取られ方)を、シャルリュスは示し続けるだろう」。

(8) 音楽家ヴァントウイユも、<謙虚>さの奇妙な例を見せる。語り手の母親はヴァントウイユ氏にお世辞で、自作の曲をぜひ聴かせてほしいと伝えたのだが、彼は「これを聞いてひどく喜んだらしいが、しかし極端に礼儀正しく、また善意のかたまりのような人だったので、いつも他人の立場に身を置いて、もし自分の欲望のままに行動したり、あるいは欲望を他人に気づかれでもしようものなら、人々をうんざりさせ、エゴイストだと思われはしないかと気にしていた」ので、語り手の両親が来たときとおおあわてでピアノの上に置いた楽譜であったというのに、「両親が部屋にはいつくると、彼はその楽譜をとり上げて隅の方に片づけた (I, 111-2)」のだった。

このように、欲望・動機にあつてすら、その姿を晦ます芸術家のあり方は、芸術家が持つ「祖国を離れているという宿命」につなげて考えられる。以下では、ヴァントウイユの二つの作品が語られる。「祈り、希望、それは実際は二つの作品において結局は一つであり、ヴァントウイユの種々の作品の中に、仮装のもとにそれと見分けることができ、一方またヴァントウイユの作品にしか見いだしえないものだった。(…) 彼以外の人の歌とは違った歌、彼のすべての歌に似ているこの歌を、ヴァントウイユはどこで学び、どこで聞いたのだろうか？ そうするとそれぞれの芸術家は未知の祖国一忘れてしまった祖国、彼とは別の大芸術家が陸をめぐしてそこを出てくる祖国とはちがった祖国

一の民なのであろう (III, 759-60)」。この祖国は、戻るべき場としての定めにおいて、苛酷な探求を仮装する。約束された優しさは、メランコリーを誘う。この主題は、「自らの問い掛けに応じて探求の旅に出てしまったが、いつのまにか道を見失った旅人」という理解において、(注21) でとりあげる「存在倫理の無・非時間性」にもつながるだろう。

- (9) *Contre Sainte-Beuve*, Gallimard, 1972, pp. 621. ここでの Baudelaire 論において、プルーストは以下のように言う。「おそらく、ああ！自らのうちに近づく死を抱え、ボードレールのように失語症に脅かされていなければ、本物の苦痛のなかで、この明晰を持つことはできないし、悪魔的な作品のなかに、この宗教的な語調を持つこともできないだろう。」
- (10) モンテスキュー伯爵には、「彼の詩集の朗読会に来なかったプルーストを1915年5月に訪れ、7時間にわたって喋り続けた」というエピソードが伝えられている。
- (11) 旧約聖書外典の「トビ書」の記述。
- (12) 「ピュロスばりの勝利」は、敗北にも等しい勝利を意味する。ピュロス (前319-前272) は、エペイロス王。ローマ軍をヘラクレアで破った (前280年) 際に、見方も甚大な損害をこうむった。
- (13) ボッシュ boche. 軽蔑的にドイツ人をさす。
- (14) 『千夜一夜物語』に関しては、プレイアード版第4巻、411頁のテキストの注として、以下のようにある (1244頁)。「回教王ハルン・アル・ラシドは、大臣シャファールに伴われて、身分をかくしてバグダッドの夜の町を歩く。彼は、美女ゾベイダの家から聞こえる声と笑いと音楽に引かれる。彼女は彼らを愛想よく迎え入れるが、ついで残酷にも2匹の黒い犬を鞭で打ちのめしては、その涙を拭いてやる。彼女が明かすところによると、彼女を裏切った二人の姉は妖精によって2匹の犬に変えられたのだが、妖精は彼女に、同じように変身させられなければ、彼女たちに毎晩、100回の鞭を与えなければならぬと言ったというのだ。この状況設定は、行為に伴う感情の多層性が、ついには行為の意味も自身の反応すらも感じられないようにしかねないという、苦痛が無感動にいたりうる形を示している。このエピソードは、本稿でこのあとすぐに論じられる、「悪循環において生きる (同じ悪徳の輪をぐるぐる回っている)」ことを指摘されるシャルリュスの快楽の追求とも重ねられる。さらに、(注21) で取り上げる「存在倫理の無・非時空性」にもつながる。
- (15) アフリカの囚人部隊とは、北アフリカに駐屯する部隊で、矯正のために送られた囚人によって構成されていた (新プレイアード版の注による)。この記述は、ジュピヤンにかく言わせた「シャルリュスの性愛を構成する差別意識の一例 (前掲書、鈴木訳注、12巻、424頁)」を表すのであろうが、この取り入りに反対の意味で対応する、第一次大戦中の大衆の生理の悪趣味の例を以下に見よう。
- 「給仕頭はフランソワーズ (語り手の家の女中) の不安をかき立てるために、雑誌『万人向きの本』 (鈴木訳注、第12巻：1898年に発刊され、1939年10月に『私はみんな知っている』という雑誌を吸収した雑誌) の古い号を何冊か彼女に見せるのだった。それは彼が見つけたしてきたもので、その表紙には (戦前の号だったが) 『ドイツ皇帝一家』が掲載されていた。『ほら、これが明日から私たちのご主人さまだよ』と給仕頭は『ギョーム』 (訳注：ウィルヘルムのフランス読み) を指差しながらフランソワーズに言う。フランソワーズは目を見開き、ついで皇帝の脇にいる女性の方に移って、『これがラ・ギョームだわ！』と言う。フランソワーズの場合、ドイツ人への憎しみは極端なもので、それを和らげるのは、ただフランスの大臣が彼女にかきたてる憎しみの気持ちのみだった。そして私には、彼女がヒンデンブルグの死とクレマンソーの死の、どちらをより強く願っていたのか分からないくらいであった (IV, 424)」。2例はともに、判断の中心点を見失って、餌食とともに感情の強さに墮する例である。
- (16) 「想像的なものの範囲こそ、人間の心的現象にとっては、存在の仕方そのものなのだから」。Serge Doubrovsky. *La place de la Madeleine*, Mercure de France, 1974, p. 152. 『マドレーヌはどこにある』綾部正伯訳、東海大学出版会、1993年、201頁。
- (17) 原田武「男爵パラメド・ド・シャルリュスの快楽」『フランス語言語文化の基礎と表層、大阪外国語大学フランス研究会、1992年度特定研究報告書』、27-33頁。
- (18) コンプレの教会に伝わる伝説とは、以下のとおりである。「テオドールとその妹が手探りで私たちを案内しながら、蠟燭の火でシジュベールの孫娘の墓を照らしだすのであったが、その墓の上に一化

石の跡のように一貝殻型の穴を一つ深く掘りこんだのは、伝えられるところでは、『一個の水晶のランプでありました。そのランプは、現在後陣のある場所にかかっていたが、フランクの王女殺害の日の夜、吊されていた金の鎖からひとりで離れ、水晶もこわれず火も消えずに、石のなかくいこみ、やわらかに石をへこませたのでありました』(I, 61)。

- (19) Jean Rousset, *Forme et signification*, Jose Corti, 1962, p. 151.
- (20) 本文中には、この引用に続いて、「もっともこれは、多くの職場において、ときには裁判官や政治家や、その他さまざまな職場においても起こるはずのものである」ともあり、習慣や性癖とならぶ文化装置の機能が、皮肉をこめて指摘されている。
- (21) André Comte-Sponville, *Petit traité des grandes vertus*, PUF, 1995, P.188, アンドレ・コント＝スポンヴィル『ささやかながら、徳について』紀国屋書店、1999年、243-7頁、「徳としての謙虚さは、自分は自分でしかないということの真の悲しみである。どうして私たちが別のものでありえようか。慈悲も自分自身に向けられることのあるものであり、わずかな優しさと謙虚さを和らげてくれる。(…) 慈悲と謙虚さは相ともなうものであり、たがいに補いあっている。(…) 謙虚さは、徳である前に知である。悲しい知なのか。そうも言えよう。」
- (22) 倫理の「無時間性」がブルーストにおいて持つ意味をを考えねばならない。「自分」に立ち戻る存在倫理(許し)の位相の超・非時間性である。ブルーストが母親や祖母にとって心配の種の繊細な子供であった事実は、『失われた時を求めて』のなかでの語り手と母や祖母との関係に引き移されている。そこでは語り手が受けた慰めも、苦痛をもって想起されるばかりだ(III, 513-4)。
- このことはまた、生命あるかぎり悔いは残るという意味において、苦痛を身体と結びつけて語らせることになる。「アルベルチヌの悪徳の現実が、私のなかにこんなに深く染み透らせた苦痛は、ずっと後になってたいそう役にたつことになった。私が祖母に与えた苦しみのように、アルベルチヌが私に与えた苦しみは、彼女と私を結ぶ最後の絆であり、思い出よりも生き長らえた。というのは、すべて身体的なものが持つエネルギーの保存によって、苦痛は記憶の教訓を必要とさえしないからだ(IV, 107)。「言葉を奪われた身体も、意図を発する(Jacques Chabot, *L'art et le moi chez Proust*, Honoré Champion, 1999, p. 388)」というように、想起される他者の「存在感」は、時空をこえる。
- (23) CSB, op. cit., p. 621.
- (24) Francois Porche, *L'amour qui n'ose pas dire son nom* (1927)。

(原稿受理2001年10月2日)